

東京パラリンピックまで200日

選手を支える裾野

NPOが人材育成

2020年東京パラリンピックまであと2000日。障害者スポーツを支える人材をどう育てるのか。NPO法人の活動を追った。

「私は目が悪いので、皆さんがうなずく様子が見えない。男性の方は手をたたいていただけませんか」

視覚障害者柔道で2008年北京パラリンピックに出場した初瀬勇輔選手(34)が拍手を求めた。

4日夜、港区であった障害者スポーツのボランティア養成講座。都内のNPO法人「STAND」が開き、10〜60代の約50人が受講した。

法曹界を目指していた中大在学中に緑内障を発症して視力をほとんど失った初瀬選手が視覚障害の等級や

パラリンピックでのクラス分けについて説明。目が不自由な人との接し方の実技指導では、狭い通路や椅子に座るための誘導方法などを伝授した。初瀬選手は「何をしてほしいのか尋ねてほしい。言葉に出すことを心がければ、コミュニケーションは円滑に進みます」。

NPO法人代表理事の伊藤数字子さん(52)は障害者スポーツの活動に参加するようになった05年ごろ、「障害者をさらし者にしてどうするつもりだ」と批判された。「特別な世界」の分野

だと思われていた。伊藤さんは障害者スポーツの体験会や、支援のための総合サイトの運営、大会の生中継をネット配信などの事業を手がけてきた。



港区＝受講者受学ぶ誘導方法を不自由な人の目

指導員資格は2万2000人取得

日本障がい者スポーツ協会が公認する指導員の登録者数も増えている。

指導員は初級〜上級と3段階に分かれ、習熟度に応じた役割が求められる。例えば、初級は18時間以上の座学と実習を受け、ボランティア論や障害の基本的な知識を身につける講義をはじめ、障害者スポーツを体験して実技を学ぶ。

協会によると2月末現在、全国で約2万2千人(都内は約1900人)が指導員の資格を取得している。協会は2020年までに3万人を目標としている。全国の自治体で研修会が開かれており、日程などは協会のウェブサイト(<http://www.jsad.or.jp/>)で確認できる。

60人の応募があった。手足が不自由な人への接し方や、大会運営を想定した英会話などを学ぶ。今月中旬には講座の様子をネットでも公開する予定だ。

実技指導を受けた神田外語大2年の石坂加奈さん(20)は、過去には車椅子バスケットボールの日韓戦で通訳ボランティアとして参加した。「障害の度合いは

人それぞれ違う。どんなサポートを必要としているか把握することが大切だと思った」と話した。

伊藤さんは「まだ手探りだが、日常的に障害者スポーツと触れ合う機会を増やしたい。2020年の先の社会も見据えて、理解に個人差がなくなるように普及に努めたい」と意欲的だ。

(辻健治、遠田寛生)